

映画「ビリギャル」にみるモチベーションの学習発達論的検討

中植 満美子

問題と目的

学習発達理論の主な領域の一つに、「動機づけ」、つまり「モチベーション」に関する研究がある。モチベーション理論の研究の中には、世界的に著名な心理学者による実験報告なども多数みられるが、筆者が研修等を実施した教育機関において、これらモチベーション研究について「もっと早く知っておきたかった」等の感想が多く寄せられ、研究領域での成果が実践に汎用され難いのではないかと思われた。そこで本論では学習の実践領域における具体的な事例を用いて実際の教育場面でどのようにこれまでの学習・発達心理学の知見を実践で活用できるか考察することを目的とする。

方法

短期間に生徒が学習成果を上げた一つの事例として、映画「ビリギャル (2015)」(原作「学年ビリのギャルが一年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話 (坪田,2013)」)がある。その概略をまとめ、主人公であるさやかちゃんのモチベーション維持に有効であった要因について、モチベーション研究者の主な理論を基に考察する。

結果 「ビリギャル」の概略

原作は、青藍義塾塾長の坪田信貴氏によるベストセラーノンフィクション「学年ビリのギャルが一年で偏差値を40上げて慶応大学に現役合格した話」である。主人公は中学から大学までの一貫校である私学高校二年生のさやかちゃんである。原作を尊重し、主人公は本論でもそのまま、さやかちゃん、と記す。

1) さやかちゃんの生育環境について

さやかちゃんの家族構成は、両親と弟、妹の五名である。

さやかちゃんの母親は、さやかちゃんが幼い頃より現在に至るまで、娘の可能性をどこまでも信じて疑わない。「ただの学歴にも名声にも意味は無い。だから、子どもに大人の理想は押し付けない。本人がワクワクすることだけさせる。それが子どもの感受性ややる気をはぐくむ」と母親は考え、子どもがどんなにつらくても、家に帰ったら楽しい、ほめられる、ということがわかれば、人間生きていけるのではないか、と思っていた。

一方で、映画の中のさやかちゃんの父親は、母親とはまるで正反対な存在として描写されており、自分の夢(プロ野球選手)を息子に託して、子どもの可能性について、一側面からの偏った見方をしていた。当然両親の間で子育てで意見が食い違い、家庭は崩壊状態だったという。このような状況であるために、さやかちゃんの夢を、父親は頭から否定してかかっていた。

劇中では、弟は父親の期待を一身に担い、黙々と野球の基礎練習に取り組んでいた。

さやかちゃんが私学の中学校に入学するきっかけとなったのは、さやかちゃんの小学校時代の体験によるものである。さやかちゃんが学校でトラブルを起こすと、学校に母親が飛んでいくが、さやかちゃんの可能性を信じている母親は学校の先生の言葉を受け取らず、さやかちゃんを叱る代わりに、「寧ろ学校が娘に合わない」と、転校を考えたという。そのようなこともあり、娘には、大学までエスカレーター式の私学の女子高がいいのではないかと勧めた。そのため、さやかちゃんは中学受験することになり、合格し、私学の中学校に入学する事となった。

さやかちゃんは進学した中学で出会った三人の同級生と仲良くなり、それ以降仲間四人で楽しい学生生活を謳歌する。高校受験も大学受験も無い環境では勉強する意味を見出さず、中学入学後は一切勉強をしなくなってしまった。その結果、徐々に学校での生活態度が目に見えるものになっていき、とうとう素行の悪さが原因で一貫校の大学への進学が難しくなってしまう。母親はそんなさやかちゃんに塾に通うよう促すこととなった。そこでこの映画の原作者の坪田氏と出会うのである。

2) 坪田氏との出会いの頃のさやかちゃんの学力

母親に連れられてやってきたさやかちゃんとの面談は坪田氏によると、以下のようなものであった。以下、坪田氏の発言を T、さやかちゃんの発言を S で示す。金髪でぱっちりギャルメイクのさやかちゃんに対し、坪田氏は次のように話しかけている。

T 「志望校どうする？」

S 「よくわかんない。」

T 「じゃあ、東大にする？」

S 「東大は男たちが、なんかがり勉で、すんげー厚い眼鏡してそうで、ダサイから嫌だ」

T 「じゃあ慶応にする？慶応ボーイって聞いたことない？だって君みたいな子が慶応とかいったら、チョー面白くない？」

S 「おお、確かに！超イケメンいそう！しかも、さやかが慶応とか、超ウケる！」

坪田氏によると、さやかちゃんのこの反応はさやかちゃんの成長の可能性を伝えるものだったそうである。というのも、プライドの高い子は、こういう提案をしても、失敗を恐れて、「ああ、でも私は・・・なので、それは無理です」と言い訳し、自分を変えようとしなからだ、と坪田氏は考えている。さやかちゃんはそういう意味でも、失敗するからといってチャレンジ

することを怖れない柔軟さを持っていたと言える。

さやかちゃんが設定した目標は当時のさやかちゃんの実力からすると現実味の無い高すぎる目標であった。通常であれば、この後、慶應義塾大学の入試の過去問題を見てすぐにやる気を失っていたかもしれない。しかしながらそれでもさやかちゃんが前向きに頑張りつづけられたのは、坪田氏に提示された目先の目標が、「これだったら出来るかも」と思えるような、細やかに設定された短期目標だったからである。実際にこの後さやかちゃんが取り組んだ課題は、小学校の算数問題と中学一年の英語のドリルだった。この細分化された短期目標の積み重ねの結果が、合格までの道筋を支えたと言えるだろう。ここに生徒だけではなく、最終目標までの道筋の全体像を客観的に捉えられる指導者の存在の重要性が示されている。

また、さやかちゃんには、失敗を恐れず、答えが当たったら「ラッキー」という感覚でどんな坪田氏の質問に答える特徴があった。以下、そのようなやり取りの例を示す。

T 「Strongの意味は？」

S 「にちようび」

T 「Japanの意味は？」

S 「じゃぱーん」

T 「Hi, Mike.を読んで」

S 「ひー、みけ」

このように、次々に間違いを連発しながらも、さやかちゃんは屈託のない笑顔で答え続けている。このようなやりとりについて、さやかちゃん自身は振り返りの中で、「学校では勉強の事をきいてこないけどここでは聞いてくるから」と、むしろ楽しんで答えていたようである。さやかちゃんは、高校では先生方に全く期待されず、相手にされていないのを感じていた。

さやかちゃんの入塾時の学力は小4レベル、偏差値30以下であったという。週に三回、塾に通い始めたさやかちゃんは、歴史の時間にこう言った。

S「センセー、あのさ、この女の子、超かわいそうじゃね？」

T「何でそう思ったの？」

S「だって、この子、きつと超デブだったから、こんな名前つけられたんだよ。せいとくたこ、なんて」

さやかちゃんが聖徳太子を、太った女子だと思った、というのは映画の広告にも使われた代表的なエピソードである。女子だと思ったのは名前の最後に「子」がついていたからだということ。さやかちゃんの間違いには彼女なりの理屈があるのだと坪田氏は察したそうである。

その他にも、日本地図を描かせると、ふわっとしたひとつの丸い形になり、北海道、本州、四国、九州から成ることも、東西南北すら知らない状態であった。このように、さやかちゃんの無知さ加減は留まるところを知らず、という感じであった。中学受験の科目に社会科がなかったからかもしれない。

坪田氏の塾は名古屋にあるため、その土地柄、有名な戦国武将たちは日常的に目にする地名等にもなっているほどであるが、もちろんそういう知識も身にはついておらず、

T「三英傑（さんえいけつ）は誰？」

S「ええけつって、セクハラ？」

と答えたそうである。

このようなやり取りが続くと、指導者の方が匙を投げそうにも思えるが、坪田氏はここでも、さやかちゃんの柔軟な発想や着想を褒めている。次のようなやりとりが原作の著書で紹介されている。

T「地球儀が丸いのはなぜ？」

S「持ち運びが、長いと不便だから」

T「コーランは何語か？」と言語の種類を尋ねたのだが、

S「一万五千語？」と、文字数を返答する。

このような、さやかちゃんの独特の発想や着想、問えばすぐに返ってくる思いつきの速さという特徴の中に、坪田氏は、間違いを怖れない、チャレンジし続ける特徴として、さやかちゃんの潜在的な可能性を見出したのである。

3) 受験期のさやかちゃんを支えた環境要因
さやかちゃんの中に成長の可能性を見出し働きかけ続けた坪田氏の塾でのサポート以外にも、さやかちゃんにはいくつかの心強い社会的サポート環境があった。以下にそれをまとめる。

a. ソーシャルサポート①母親

受験が現実的になってくると、これまでの週三回コースではとても受験に準備が間に合わないということで、坪田氏は母親と相談し、毎日でもさやかちゃんが塾を利用できる無制限コースに切り替えることとなる。そこで生じる高額な塾の費用を、劇中では事業の経営主である父親は理解せず支援しなかったため、母親がパートを掛けもちし、親戚に頼み込んで工面した。「慶応への合否はどうでもいい、勉強が好きになってくれたことがお母さんは嬉しい。」と伝えながら用意された封筒の分厚さに、さやかちゃんは、「塾では一分でも寝られない」と、その思いを真摯に受け止めた。母親の自分への信頼感がさやかちゃんを更に奮い立たせる原動力の一つとなっていただろう。

b. ソーシャルサポート②友人たち

どんなに勉強が忙しくなっても、友人たちとの予定のために、さやかちゃんは更に頑張り続けた。時には問題集持参でカラオケ参加の姿もあ

ったという。友人たちはそれを見ていて、さやかちゃんの足をひっぱらないように、一緒に遊ぶのを入試までやめようと提案してくれた。学習に集中できる環境がここで整ったといえる。このように、塾、家庭以外にも心の支えとなる社会的サポートがあったことはさやかちゃんにとって大きなメリットであったといえよう。

4) 細分化された短期目標設定の実際

坪田氏によると、学習開始時は、学習者本人が、自分でもバカにするような簡単な、しかも薄い問題集から解き始めるように指導しているという。それを二週間ぐらいの短い期間で終了させる。解ける問題であればモチベーションは下がらないし、学習に向かうための姿勢作りになる。いきなり志望校の過去問題集（いわゆる赤本）を解かせたりはしていない。坪田氏は、赤本は、問題の出題傾向をちらっと読ませるだけでよいと考えている。

さやかちゃんの場合は、小学校の算数の復習と、英語は中学生の復習ワークを実施した。英語は11日で全てやり終えている。

5) 時間管理の重要性—長時間だらだらとせずにタイマーで計画的に学習

また坪田氏は、学習時にはタイマーを準備して、目標時間の8割ぐらいの時間で終了させている。その後自主的に採点させ、解答集を見て誤りを理解させる。

6) 実施計画

実際の初期の指導に用いた教材は次のようなものであった。

- ・ 中学英語の総復習の問題集一冊
- ・ 現代文の初級の薄い問題集一冊
- ・ 古文の薄い問題集一冊
- ・ 古文の単語帳を一冊作る

これらの問題集を終えた時に坪田氏がさやか

ちゃんに掛けた言葉は、「わからないと思っていたのが終わったね」また、「こんなに分厚いものをたくさんやれたね」というものであった。薄い問題集ではあっても、一冊終わらせたことによる達成感は大きく、何冊か積み重ねることでこれらを乗り越えた感覚をまず体験することで、生徒は自分でもやれるのだ、という自己効力感を取り戻すことが可能になる。

7) 結果への期待感を高める（モチベーション＝結果への期待×自己効力感）

一年半、受験勉強を頑張りつづけられた理由を、さやかちゃん本人は次のように語っている。

①お母さんがこれ以上費用を捻出できないと思うので、これが最初で最後のチャンスだということ

②先生と話をしていて、頭のいい人と話すのは面白いと思った、慶応の人たちは皆そうだろうし、慶応を卒業する事がどういうことか坪田先生が繰り返し教えてくれた。

このように、合格の向こうにどのような世界があるのかを想像できるような機会を得られたことで、さやかちゃんには結果への期待感が形成されていったと考えられる。

8) 逃げ場をなくす

序盤から坪田氏は、さやかちゃんがクイズに不正解だった時に、マスカラを落とさせたり、ファンデーション禁止にしたり、「見た目」にこだわるさやかちゃんにとっての絶好のペナルティを考えた。

前述した通り、友人たちの配慮により、入試までは仲間内のお出かけもとりやめになる。すると、ついにさやかちゃん自身が髪を黒く染め、スカートを短くするのをやめ、長いソックスを履いて、遊びに行けない「ダサイ」さやかを敢えて演出し、逃げ場をなくして、おしゃれに使うエネルギーをも節約して勉強に向ける決意が

可能になった。前述した、今年一度きりの、最初で最後のチャンス、というのも、自分を追い込む機会となった。

9) スランプ・伸び悩みの時期に

学習に集中できる環境と、自分に合った学習法による指導の結果、さやかちゃんはついに入試の模擬試験に挑戦したり、過去問を解くようになる。こうして現実と直面すると、ここで自分がどれだけ難しいことにチャレンジしようとしているのかという実際が見えてくるようになった。模擬試験の判定が思わしいものでなかったり、点数に伸び悩みがあると、いくら前向きなさやかちゃんでも全て止めてしまいたいと思う時もあった。

その時に有効だったのが、志望校である大学訪問だった。現実の大学を見学にいってみることで、そこで来年学生生活をおくるイメージトレーニングが、意欲の再燃につながった。

10) ストレス解消法

坪田氏はさやかちゃんに、日記を書くことも勧めている。逃げ場をなくしてしまったさやかちゃんにとって、そこでの感情の吐露が唯一の発散の場となっていた。坪田氏はさやかちゃんに、どんな事を書いても、必ず最後はポジティブな文章で終わらせるようにアドバイスしていたそうである。このような配慮の結果、さやかちゃんは一日を絶望で終わらせず、日記を振り返りと明日のための反省として利用できた。このために未来への期待や希望を持ち続ける事が出来たのだろう。

11) 映画の結末

さやかちゃんは猛勉強の末、関西学院大学、明治大学に合格し、そして本命の慶應義塾大学総合政策学部合格することができた。この頃には、学校での試験の偏差値も60を超えていたそうである。

坪田氏は、さやかちゃんが元々私学の中学受

験に合格する実力を持っていた「地頭」のよい子だったから出来たことなのでは、と、著書や映画を観た人から質問をされることがあるそうだが、それに対して坪田氏は、さやかちゃんを通して通っていた高校から、現役で、一般入試で慶應義塾大学に合格したのは、さやかちゃんただ一人だった、と回答している。つまり、元々一般入試で慶應合格者を多数輩出しているレベルの高校にさやかちゃんが行っていたわけではないため、さやかちゃんの快挙は彼女の成長を示すものだと言えるだろう。

坪田氏自身、コーチングという心理学の技法を利用して、受験生の指導にあたっているというが、その中でも特に重要視しているのが、メンタル・目標・計画、の三点ということであった。

子どもの失敗を笑わず批判せず、柔軟な発想、着想を褒めること。その子どもに応じた目標設定をさせるが、その子どもが本当に求めてやまないような目標を持たせること、そこに至るまでの細分化された短期目標を、全体像を見渡せる指導者が把握し、設定を支援すること、結果への期待感を高めること、どんなに小さな課題でも一つ一つ乗り越えた感覚を体験させ自己効力感を養うこと、時間を自分でコントロールできるようにすること、長時間ダラダラせず、タイマーで計画的に学習するように指導すること、社会的サポートを持つ事、本人が納得する形で逃げ場をなくすように環境調整すること、イメージトレーニングすること、ストレス解消法を持つこと。以上が坪田氏がさやかちゃんの学習支援において実施したと考えられるモチベーション維持につながった支援の概要である。

考察

さやかちゃんの学習指導に用いられたテクニックとモチベーション理論

坪田氏が実施してきたさやかちゃんへの学習指導の方法について、考察の中で、学習心理学

理論を用いて検討を行う。ここで用いる初期の学習心理学理論については、森他（2011）による「学習心理学」の中から、特にモチベーション理論については、中條（2011）の「学習の動機づけ一人はなぜ学ぶのか？」を参照する。

学習心理学とは、主として、動物を被験体とする条件付け研究によって発展してきた連合理論（刺激と反応、S-R 理論）であり、近年では初期の学習理論を批判する形で認知理論的な学習研究における動機づけ研究が展開されている。

① 内発的動機づけ

認知理論的学習研究への転機となった事象の一つとして、動物実験を通じて発見された、動機づけの二つの種類がある。その一つがトルマン (Tolman, E.C.) の実験である。この実験では、従来の S-R 理論に必要な報酬が無くても課題を学習していたネズミの存在が認められた。このように、動物にみられる、新奇場面で生きるための生得的な欲求は、内発的動機づけと命名された。このような現象は、アカゲザルを用いたバトラー (Butler, R.A., 1953) やハーロー (Harlow, H.F., 1950) の実験でも確認されており、動物にも知的的好奇心があるということが示された。

つまり、「内発的動機づけ」とは、行動それ自体を目的とする動機づけ (Young, 1961) であり、例に挙げたアカゲザルにとっては、課題であるパズルを解くこと自体が報酬となっていたと考えられる。

一方で、「外発的動機づけ」とは、行動と報酬との間に何の必然的な結びつきもなく、報酬を得る手段として生じる行動である。例えば、飢えた動物が、ある装置のレバーを押すと餌が出てくることを学習するとレバーを押し続けるが、飢えが解消されてしまえばレバー押しはしなくなる。

デシ (Deci, E.L., 1975) は、人間の子ども在教育場面での例をあげて、人間の場合の二つの動機づけを定義した。

デシによると、その行動以外に明白な外的報

酬が存在しないならば、その行動は内的に動機づけられていると考えられる。授業の内容に興味を持ち、子どもが自分で図書室で調べ物をしているとすると、その行動は内発的動機づけによるものである。学習を深めたい、技能を高めたい、というのは熟達指向性 (Harter, S., 1981) と呼ばれる。

「ビリギャル」のさやかちゃんのモチベーションも、どちらがより優位に表出していたかを振り返ると、内発的に動機づけられていたと考えることが可能であると考えられる。さやかちゃんには、慶応義塾大学合格という目標があり、しかも高校に対して見返したいという思いがあるながらも、純粋にただ他者に認められるために勉強していたとは言えない。それよりはむしろ、博学な坪田氏との会話を楽しみ、自分ももっともっと知りたい、学びたいと願っていたように思われる。母親の言葉にも、大学合格より、本人の成長を願う思いが表現されていた。坪田氏のもとで、出来る範囲の簡単な問題から徐々にステップアップさせてもらえることで、学習自体が楽しみに思えたのではないだろうか。

一方で、他者からもたらされる報酬を得たり、罰を回避したりするための手段として生じるのは外発的動機づけとされる。大人にほめられたい、しかられたくない、という動機によるものである。外発的動機づけにより勉強している子どもは、報酬や罰が与えられなくなると、勉強をしなくなってしまう。この現象はアンダーマイニング効果 (Deci, 1971) と呼ばれている。

② アンダーマイニング効果

デシ (Deci, E.L., 1971) は、外的報酬が、内発的に動機づけられた行動に及ぼす抑制的な効果についての実験を実施した。

金銭的報酬のある実験群は、報酬を得た後では、課題である自発的なパズル解きを行う時間が減少した。これは、外的報酬が、もともと内発的に動機づけられていた行動を抑制する現象であり、アンダーマイニング効果と呼ばれている。

る。

しかしながら、「平均以上の出来ですね」など、言葉での正のフィードバックを与えると、行動の頻度の低減は起こらなかったという。これはつまり、言葉による自己効力感の効用、コンピテンス (White,R.W.,1959) によるもの、と考えられている。人間は効力感を感じることに内発的に動機づけられている。つまり、効力感を求めて環境に働きかけるのだ。

「ビリギャル」のさやかちゃんの場合は、元々ほめられたい、失敗したくない、という気持ちがあるが他の学習者より見られなかったように思われる。それは坪田氏のクイズに、失敗を続けてもチャレンジし続けた姿勢からも見て取れる。

③ 学習性無力感

セリグマンとメイヤー (Seligman,M.E.P.&Maier,S.F.,1967) は犬を被験体として「どうせ何をやっても無駄だ」という無力感、つまり、何事に対しても成功の期待が持てない状態を実験で人為的に形成した。犬は、電流の流れる檻に入れられ、どのように行動しても電撃から逃れられない、という対処不可能性を学習してしまう。その後、檻から脱出しやすい状況に移されても、檻から脱出しようとしなくなってしまう。これは、「なんとかなる」という期待の形成が学習意欲を規定していることを示している。この現象は人間においても同様に見られる。ドゥエックとレップッチ (Dweck&Reppucci,1973) は人間の無力感の学習について、小学五年生を対象に実験を行った。子どもたちに立方体ブロックを組み合わせるパズルを解かせる。片方の被験者にはやさしい練習問題を出し、もう片方には難しい練習問題を出した。本番の問題はどちらの被験者にもやさしい問題が出されたが、初めに難しい練習問題を解かされたグループの子ども達は、解答できないばかりか、問題を解こうともしなかった。解けない問題を出し続けられると、セリグ

マンらの実験の犬と同様に、子どもたちも対処不可能性を学習してしまうのである。

この実験は、子どもたちは最初から無気力なのではなく、「聞いててもわからない」「勉強してるのに、成績が振るわない。」という失敗体験の積み重ねによって子どものやる気が奪われていることを示している。

「ビリギャル」のさやかちゃんは中学進学後、高校、大学入試のない学校に入ったことで、勉強する目的を見失っていた。そんなさやかちゃんに対し、映画の中では、高校の担任が、さやかちゃんが慶應義塾大学に合格するわけがないと決めつけていた。前述したが、さやかちゃん自身も、「学校では勉強の事をきいてこないけどここ(塾)では聞いてくるから」と、高校では先生方に全く期待されず、相手にすらされていないのを感じていた。大人に相手にされない自分に子どもが自己効力感を持てるわけもなく、どうせ無理、と、学習から遠ざかっていたさやかちゃんは、まさにこの「学習性無力感」に捉われていたのかもしれない。

このような状況に陥った場合は、小さい成功体験を積み重ねさせる指導を心がける配慮が必要であり、目標設定時に全体像を見据えて、目標までの道筋を客観的に指導を出来る存在が不可欠である。坪田氏はまず、さやかちゃんに、簡単に出来る問題を解かせることで、「やればできるのかも」という感覚を生じさせ、さやかちゃんがこの無力感から脱却するのを手助けしたと言える。

④ 自己効力感と結果への期待感

バンデューラ (Bandura,A.,1977) は、モチベーション研究において、動機づけを、「動機づけ=結果への期待感×自己効力感」という公式で表した。それによると、常にモチベーションを保ち続けるためには、「自分には対処出来る」という感覚の外に、「どのような素晴らしい

結果が待ち受けているか」、という期待感が重要だとされている。

「ビリギャル」のさやかちゃんの場合には、スランプに陥り伸び悩んだ時期に、志望校である慶應義塾大学に見学を訪れている。坪田先生のように知的な面白い人たちと話をしてみたい、自分もその一員になりたい、という思いはその訪問で再確認できたのではないかと考えられる。慶應義塾大学を出ることが意味することについても坪田氏は常々さやかちゃんに語って聞かせていたという。

⑤ 原因帰属理論

失敗しても一向に気にしない人もいれば、一気にやる気が失せる人がいる。二者の違いについて研究をしたのがワイナー (Weiner, B., 1972) である。ワイナーは、失敗や成功といった行動の結果の原因をどのように考えるかが、「期待」に影響を与えると考えた。つまり、原因帰属の様式が動機づけに影響を与えるということが理論化された。

困難に直面した時 (例：テストが出来なかった、等) の子どもの、その原因についての「フレーズ」を挙げてもらい、それを原因帰属理論に基づき分類してみると次のようになる。

- A 「こんなの習ってないし」 (課題の困難さ)
- B 「朝の占いで今日は最悪だった」 (運まかせ)
- C 「どうせ俺はバカ (だから出来ない)」 (能力)
- D 「今回勉強時間が足りなかった」 (努力)

ワイナーによると、失敗の原因を自分の能力と関連付けて考える人は、それまでの失敗体験を通じて、失敗の原因を自分の能力不足と考えるような帰属様式を獲得してしまっている。そのために、結果の期待感を得られなくなり、やってもどうせ無駄だろうと努力しなくなり、結果は改善されず、悪循環のループにはまってしまう。つまり、このような子ども達にとって、失

敗の原因を努力に原因帰属するような大人のフィードバックが重要だと考えられる。そのために必要な大人の「フレーズ」にも工夫が必要である。それは、例えば、

「前に良くできた時と比べて、準備の時間はどうだった？」というように、他者との比較ではなく、自分の中での小さな成功体験との状況比較をさせること、また、結果だけではなく、過程の充実度に目を向けさせることが肝要である。

前述の A～D の分類で、D の「努力」に結びつかない原因帰属は、「自己防衛」の目的で生じているとも考えられる。自分の弱さを受け入れられないから、自分の「努力」以外に原因を求めている。過度な防衛はその後認知面での歪みや正当化を生じさせる恐れがある。更なる傷つきを防ぐためにも、取り組んでいる課題の難易度を工夫する必要があると考える。

「ビリギャル」のさやかちゃんの場合は、どれだけ間違えてもチャレンジし続けたことから、自分の傷つきを守るための防衛作用や言い訳は生じていないように思われる。このことより、はっきりと明言はしていないが、私学の一貫校に入学したことで、高校や大学入試が無くなり、勉強の必要がなかったので学習してこなかったが、自分が勉強できないのは、勉強してこなかったからで、これから努力すれば変わるはず、という自分への信頼感が感じられる。

⑥ 再帰属訓練

ドゥエック (Dweck, C.S., 1975) は、不適切な原因帰属の様式を身に付けた子どもたちに対して、再帰属訓練 (1975) の実験を実施した。25 日間に渡り、1 群には成功体験のみをフィードバックし、2 群には失敗しても、解答の手助けをし、「努力が足りなかったためだ」と励ましの声掛けをし、子ども自身の力だけで解けるような問題をその後用意した。その結果、成功体験だけをさせた 1 群に変化はなかったが、2 群

の再帰属訓練の子どもたちの無力感は大きく改善されていた。

ドゥエックの実験により、人が一度獲得した帰属様式は、時間を懸けた丁寧な対応によって変化し得ることが明らかとなった。

「ベリギャル」のさやかちゃんも、もしも坪田氏に出会っていなければ、現状よりも成長したいと思わなかったかもしれない。ドゥエックの実験は小学生対象であるが、さやかちゃんの事例により、再帰属訓練が思春期・青年期においても適用が可能かもしれないことが示された。

⑦ 目標理論

また、ドゥエックは、原因帰属様式が、それぞれの子どもの抱く目標によって規定されていることを明らかにした。何を学ぶかではなく、何のために学習するのか、という観点から、学習目標と成績目標の二つに目標を区分した。学習目標は、自分の能力を増大させることであり、成績目標は、良い成績を上げて皆に認められることを目標としていた。成績目標を持つ子どもで、現在の能力への自信が低いと、無力感に陥りやすいことが示された。目標の違いが行動パターンに影響するという理論をドゥエックは目標理論と呼んだ。

つまり、同じ学力でも、失敗を経験することによって、無気力に陥りやすい子ども、不適応な無力感反応を示す子どもは、能力評価を気にして挑戦を回避し、課題遂行の低下を示すとされた。このような子どもたち（成績目標）の行動の目標は評価されることであり、行動に自信がある場合は問題ないが、自信が無い場合、無気力に陥りやすいという。

一方で、やる気を失わずに困難に挑もうとする子ども、適応的な熟達指向的の反応を示す子どもは、困難な課題に挑戦し続け、失敗を経験しても、次の取り組み方を工夫して努力を続けることが出来ると考えられた。このような子どもたち（学習目標）の目標は、自分自身が成長す

ることであるため、行動に自信があろうがなかろうが、無気力に苛まれることはないと考えられている。

「ベリギャル」のさやかちゃんの場合は明らかに、自分自身の成長を目標とした「学習目標」タイプだと言えよう。良い結果を報告したい母親自身が、大学合格という単発の結果ではなく、娘の成長だけを純粋に願っていたこともある。どこかで、自分を認めようとする父親や高校の担任に対しては見返してやりたい気持ちはあっただろうが、それは主たる目標とはいえない副次的なものだろうと考えられる。

こうした母親の姿勢は、最後に挙げるドゥエックの「マインドセット（心の構え方）」の在り方にも大きく影響している。

⑧ こころの構え方、「マインドセット」

ドゥエックは目標理論を更に発展させ、人の心の構え方を「マインドセット」という概念で表した。それには二つのタイプがあるという。

まず、「硬直マインドセット」のタイプは、自分の能力は石版に刻まれたように固定的で変わらないと信じている人で、才能が全てだと考えている。誰かに認めてもらうことが全てなので、自分の能力を繰り返し証明せざるにいらぬ教室でも職場でも人付き合いの場でも、自分の有能さを示す事ばかりに心を奪われている。しくじらずにうまくできるだろうか、賢そうに見えるだろうか、バカと思われやしないか、認めもらえるだろうか、突っばねられやしないか、勝ち組でいられるだろうか、負け組になりはしないかといつもびくびくしている。

このようなマインドセットは、成功、という結果ばかりを重視するフィードバック中心の環境により、形成される帰属様式によるものだと考えられる。

一方で、「柔軟なマインドセット」のタイプは、人間の基本的資質は努力次第で伸ばすことができるという信念を持ち、持って生まれた才能、

適性、興味、気質は一人ひとり異なるが、努力と経験を重ねれば、誰でも皆伸びていけると考える人たちである。うまくいかないときにこそ、粘り強い頑張りを見せる、という特徴の主である。

このようなマインドセットは、努力を重視するフィードバック中心の環境により形成される帰属様式による。

「ビリギャル」のさやかちゃんは明らかに後者のタイプである。このような素質は、おそらく彼女の可能性を信じて疑わなかった母親の、掛けつづけた言葉や応援、失敗を受け入れ、次につなげられるように手助けした姿勢の産物ではないだろうか。坪田氏の学習支援のテクニックが最大に効果を発揮した背後には、16年の歳月、努力を続けた母親の、準備段階が存在していたからで、そこが最も重要な要因であったと言えるのではないだろうか。誕生の時からさやかちゃんのモチベーションの素地は、母親によって整えられていたのだろう。さやかちゃんの事例は、大学入試を控えた女子高校生の事例でありながら、乳幼児期からの「心の構え方—マインドセット」の整え方の重要性を示唆するものであったと考える。

以上のような学習発達理論がさやかちゃんの奇跡的な受験の成功を説明している。坪田氏はその後、学習者それぞれの性格に応じた指導法の研究を行っており、性格と言う要因によるモチベーション促進という近年の学習心理学における動機づけ研究のテーマに近い視点での有効な指導法を提唱している。坪田氏の近年の著書によると、本論のさやかちゃんは、「楽観主義」に分類される。やれば何とかなる、というような柔軟な心の構えを持つタイプ、と考えられる。このように、性格のタイプ別に記された、指導者の立場からの関わり方の工夫の提唱は、大変興味深い。しかしながら、坪田氏の「90問法」について、著書に標準化の手続きについての記

述がないため、統計的な信頼性、妥当性の検証が今後の課題と言えよう。

文献

Deci,E.L,&Flaste,R.(1995) *Why We Do What We Do* -The dynamics of personal autonomy, New York G.P.Putnum's Sons (桜井茂男(監訳) (1999) 人を伸ばす力 新曜社)

Dweck,C.S. (2006) *Mindset*, New York, Random House. (今西康子(訳) (2008) 「やればできる！」の研究 草思社)

Dweck,C.S. (2006) *Mindset*, New York, Random House. (今西康子(訳) (2016) マインドセット「やればできる！」の研究 The New Psychology of Success 草思社)

森 敏明・岡直樹・中條和光(共著) (2011) 学習心理学 培風館

坪田信貴 (2013) 学年ビリのギャルが一年で偏差値を40上げて慶応大学に合格した話

KADOKAWA

坪田信貴 (2016) 人間は9タイプ 子どもとあなたの伸ばし方説明書 KADOKAWA

山内光哉 春樹豊(編著) (2001) グラフィック学習心理学 行動と認知 サイエンス社